

甲州市勝沼町の集落形成に関する研究

上田 あゆみ

工学院大学大学院工学研究科建築学専攻2年

1 概要

工学院大学後藤研究室では、甲州市勝沼町の文化的景観の保存活用の一環として、平成29年度より3年間にわたり町内の歴史的建造物についての悉皆調査及び実測調査をおこなった。そこで、甲州街道勝沼宿の主屋には、町家型と農家型の平面形式が混在していることが明らかになった。本稿では、中世から近代にかけての集落形成の変遷を追うことで、甲州街道勝沼宿の民家の特徴を明らかにすることを目的とする。なお、研究対象範囲は甲州市勝沼町の範囲とする。

2 先行研究と本研究の位置づけ

①『甲州街道勝沼宿保存対策調査概要』（1993）

甲州街道勝沼宿及び等々力村の歴史的建造物の保存状況などを把握するとともに、これらの環境の保存対策の検討を目的として設立された「甲州街道勝沼宿伝統的建造物保存対策調査委員会」による調査資料である。調査内容は、歴史的建造物及び社寺建築、石造物の分布調査、実測調査、資料調査である。本稿では、経年による変化がみられる部分の再調査と追加調査をおこなった。

②上田あゆみ『甲州街道勝沼宿の民家の変遷に関する研究－近代以降の発展を中心として－』（2017）

③甲州市教育委員会『勝沼のブドウ畑とワイナリー群の文化的景観中間報告書』（2019）

②は上田あゆみ、③は工学院大学後藤研究室の研究であり、一部その稿を引用する。本稿は、先行研究の結果を踏まえながら考察していく。

3 山梨県甲州市勝沼町について

（1）勝沼町の概要

勝沼町は、山梨県中央部、甲府盆地の東南端に位置する。総面積は32,238 km²、その45%は山野、35%が傾斜地、20%が平坦地であり、東西9.5km、南北7.9kmである。勝沼町の地形を大別すると、東部及び南東部の山岳地帯と、日川、鬘櫛川、田草川、重川などの河川によってつくられた複合扇状地とに分けることができ、標高は最低が海拔330mから、最高1,412mに分布している。町の東部では、山地が連なって大きな尾根が走り、険しい地形を形成している。一方、平地は日川扇状地、京戸川扇状地、大滝川扇状地で構成され、菱山地区から柏尾に至る山地のすそ野は急傾斜地になっているが、その他は盆地の中心部に向けてなだらかに傾斜している。勝沼宿の一带は、日川の北側に沿っており、標高は地区の東端で

約 477m、西端で 350m、高低差 127m、平均勾配 3,7%となっている。

（２）勝沼町の歴史

中世以前は、勝沼町及びその周辺は武田一族の支配下であり、その居館跡が残されている。武田氏の敗亡以降は、支配体制の移り変わりの中で、勝沼町の村落構成が形つくられた。

近世に入ると、元和 4 年（1618）に甲州街道の新規宿駅として勝沼宿が誕生した。『甲州道中宿村大概帳』（1843）には、甲州盆地と江戸の接点として、多くの物資が集散する中心地としてにぎわいをみせていたと記されている。この時代の主な産物は米や麦であった。

近代以降は、明治維新の後、宿駅制度が廃止され、新たに設立された陸運会社や馬車鉄道を受け、



図 1 勝沼町旧村配置

より活性化した交通便は更なる経済活動を促した。大正 2 年（1913）、勝沼駅（現在の勝沼ぶどう郷駅）が設置され、それまで人や馬によって輸送されていた作物が大量に運ばれるようになり、農業への転換も多くみられ、養蚕や畑作の増加が著しくみられた。また近代化に伴い、ワイン醸造用としてのブドウの需要増大、また戦時中はワインやブドウの葉から抽出される酒石酸が潜水艦の水中聴音機に利用できることから増産された。戦後も高度経済成長期に果実の需要が増大したことから、ブドウの栽培面積は伸び続け、現在でも有数のブドウ産地として有名である。

明治 8 年（1875）から昭和 29 年（1954）にかけて 10 ヲ村が合併し、現在の勝沼町になった。旧村の配置は図 1 の通りである。

4 街道による屋敷構えの影響

（１）勝沼町の主要な街道

甲州市には古道が存在し、そのうち勝沼には鎌倉道とその支道、甲州街道が通る。各々の街区構成を以下に述べる。

勝沼の街区形成をみていくと、中世に河岸段丘上の盆地方向を俯瞰できる位置に勝沼氏館が立てられ、その後、近世には段丘上の尾根筋を甲州街道が通り、勝沼宿ができる。街路は等高線に直行する形で形成され、館を中心に同心円状の地割がされている。これは、鎌倉道や小佐手小路などに見られ、東西方向の傾斜を意識した街路形成がされているのがわかる。対して、甲州街道は中世の街区形成とは異なり、河岸段丘などの南北方向の起伏や傾斜を意識したものであると考えられる。



図2 勝沼町標高図と街道の分布

(2) 岩崎地域の街区構成

勝沼町南部にある岩崎地域では、明治時代頃まで日川下の旧道である鎌倉道とその支道が主要な道であった。鎌倉道の支道である旧道沿いには、多くの寺院が立地し、道祖神や馬頭観音が見られる。形状は、直線的ではなく、畑地の間を折れ曲がりながら配されている。その後、新道と呼ばれる県道田中勝沼線が幹線となり、その沿道に多くの家屋が並び、戦時まで製糸業に関する多くの工場が並んだ。



図3 岩崎地域の街道

5 勝沼町の主屋配置

(1) 現存する歴史的建造物の分布

先行研究にて歴史的建造物の分布状況について調査されているが、約25年が経ち分布状況に建て替えなどによる変化が見られたため、先行研究③で改めて悉皆調査をおこなった。悉皆調査では、甲州街道沿いに現存する建物の目視調査をおこない、現存する歴史的建造物の分布状況、各建物の推定年代、構造、正面形式、屋根形式、屋根材、屋敷構えなどを記録した。本研究では、41軒追加調査をおこなった。

①H家（甲州街道沿い）

仲町の甲州街道沿い南側に北面し、敷地は短冊形である。屋敷配置は、東から東土蔵、主屋、西店舗と並ぶ。蔵は妻面、主屋と店舗は平面を接道させる。主屋は、木造2階建て平入の切妻造桧瓦葺屋根である。主屋の平面構成は、正面左（東側）に出入口があり、土間がL字に配されている。出入口から南へ伸びる土間は幅1間半の通り土間で、土間に接して和室2部屋が南へ3列並んでいる。



写真1 外観

②S家（甲州街道沿い）

移築以前は、等々力の甲州街道沿い南側に北面して建ち、敷地は短冊形である。屋敷配置は、東から主屋、土蔵と並ぶ。蔵は妻面、主屋は平面を接道させる。主屋は、木造2階建て平入の切妻造桧瓦葺屋根で養蚕用の突き出し屋根を設ける。平面構成は、東にある出入口から南に伸びる通り土間があり、部屋は2列に3部屋続く田の字型の形式をとる。



写真2 外観古写真

③E家（小佐手小路沿い）

小佐手小路沿いの西側に東面し、敷地は正方形である。屋敷配置は、主屋を北寄せに接道させ、その南に付属屋が東西に並び、敷地西側にブドウ畑が広がり、川に接する。主屋は木造2階建て平入の切妻造桧瓦葺屋根である。平面構成は、土間があり、部屋は2列に3部屋続く田の字型の形式をとる。



写真3 外観

④U家（県道田中勝沼線沿い）

県道田中勝沼線沿いの南側に北面し、敷地はL字型である。屋敷配置は、主屋を北寄せに接道させ、その南西にブドウ畑が広がり、西側は川に接する。主屋は木造平屋建て平入の切妻造鉄板葺屋根（当初は茅葺）である。主屋の平面構成は、土間があり、部屋は2列に2部屋続く田の字型の形式をとる。



写真4 外観

6 旧村の形成

(1) 史料からよみとく街区形成

①勝沼村

明治14年(1881)6月に描かれた『東山梨郡勝沼村略図』は、勝沼村最古の絵図である。絵図は甲州街道を中心に描かれ、大善寺領、小佐手小道、鎌倉道、家屋の並びが描かれる。家屋について、甲州街道沿いのものは接道して建ち、甲州街道沿いには大善寺から上行寺にかけてはまばらに並び、上行寺から等々力村境にかけては固まって並ぶ。小佐手小道、鎌倉道沿いの家屋は、接道しているものが数か所あるが、多数は接道ではない。

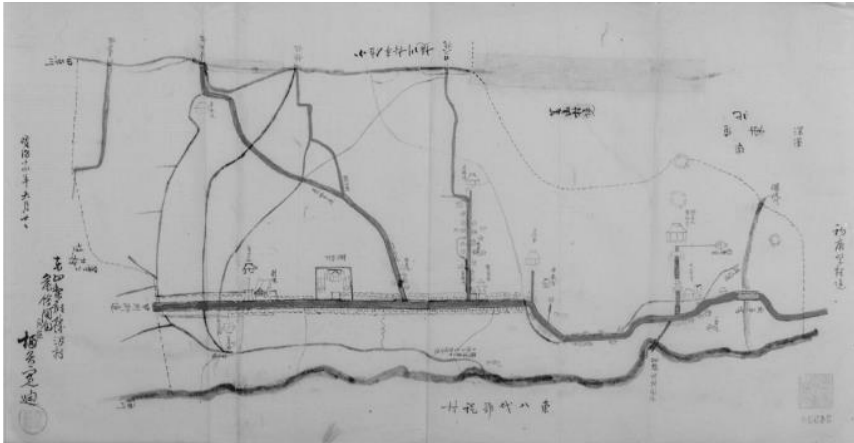


図4 東山梨郡勝沼村略図(甲州市教育委員会所有)

明治10年(1877)に作成された『勝沼宿番順屋敷取調帳』は、勝沼宿の敷地の縦横寸法を記載した台帳である。結果、勝沼町全体としては、梁間が5～10間のものが65%を占める。桁行に関しては、14～16間が22%、21～22間が13%を占め、やや固まっているが、全体的にまばらな分布傾向である。また梁間について地域別に見ると、上町は6～7間が41%、仲町は5～7間が45%、本町は5～8間が54%を占める。富町は6～10間が82%を占め、8間が1番多く34%を占める。堰合町は、8～9間が53%を占める。

明治16年(1883)に作成された『勝沼宿建物取調帳』は、勝沼宿の建物の縦横寸法を記載した台帳である。その中でも建屋という項目に着目すると、全体で240軒あり、梁間は2間が一番多く全体の35%を占めた。また、全体の72%が2～3間であった。桁行は5間が一番多く全体の21%を占め、3～6間が59%を占める。

②綿塚村

宝永4年(1707)に描かれた『綿塚村絵図』は、綿塚村最古の絵図であり、法量は不明である。絵図は南上で描かれ、各戸の家屋と田畑の所有地を中心に描かれている。村には天神社、飯縄神社、大石神社の3社がある。基本的に主屋は東西に妻面を向け、敷地半ばに配置されているが、一部敷地が短冊形で細長い場合は南北に妻面を向ける。また、飯縄神社の参道には、主屋の平面を接道させるものが数軒みられる。

（２）現状からよみとく街区形成

現在の綿塚村は、前述でとりあげた『綿塚村絵図』と比較しても街区形成が当初の形を残している。したがって、勝沼町の近世の姿をよく残している地域として悉皆調査をおこなった。

①〇家（綿塚地区）

飯縄神社の参道の南側に北面して建つ。敷地は正方形である。屋敷配置は、南東に蔵、北側に庭を設ける。主屋は木造平屋建て平入の切妻造鉄板葺屋根（当初は茅葺）である。現在の主屋の平面構成は、土間があり、部屋は２列に２部屋続く田の字型の形式をとる。

ヒアリング調査によると、改修以前は土間の西側は１室、２室と部屋が並んでいた。また、痕跡調査によると、下屋と上屋の通りに柱がないことと、２段梁があることから、江戸後期の竣工であると考えられる。



写真5 外観

7 勝沼町の民家の特徴に関する考察

（１）甲州街道沿いの特徴

敷地の形状は、短冊形と不整形の形が見られた。敷地の使い方は、南北関係なく主屋を接道させて配置させることが多い。また主屋の横に土蔵を接道させる場合もある。

建物の形態は、木造２階建て、平入、切妻造り葺き瓦葺きのものが多くみられる。主屋は店舗を兼ねているものも多く、看板建築に改築している例も多くみられる。

平面形式は、平面形式は、主に町家型、農家型の２つに分けられる。町家型は、前土間及び通り土間があり、１室３列の部屋が並ぶ。間口の広さによって、２室が並んだり、通り土間を挟んで部屋が設けられる場合がある。（図４）

町家型は主に富町から東側の地域にみられ、これは間口が狭く奥行が長い地割故だと考えられる。

一方、農家型の平面構成は、入り口奥に土間が通り、田の字型に部屋が配置される。町家型に比べて、比較の間口が広い地割になっている。

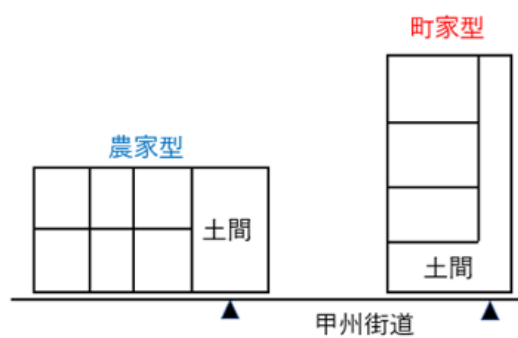


図4 宿場町の平面形式

（２）農村部の民家の特徴

敷地の形状は、ほとんどが不整形の形である。敷地の使い方は、北に主屋を寄せ、南に庭をつくる形が一定して見られ、南側に入り口を設ける。小佐手小路などの南北に延びる道に接する場合、主屋の妻面を接道させることが多い。また、敷地と敷地の間に水路を設ける所が多くみられた。これは、敷地奥に畑地を併設することが多い故と考えられる。

田中勝沼線などの東西に延びる道に接する場合、南側の家は北側に入り口を設ける箇所も数軒みられた。特に、田中勝沼線の東端の民家に多く、これは間口が狭く側面に入口を設けられなかったことに起因すると考えられる。

建物の形態は、切妻造、平入、茅葺が伝統的な形態であったと推測できるが、そこに突き上げ屋根を用いたものが近世以降普及する。

また、群馬式の越屋根を持ち、総 2 階の切妻造平入の民家もみられる。在来工法による複合屋根で一部 2 階建ての建物も存在し、種別は多様である。

平面形式は、入り口奥に土間が通り、田の字型に部屋が配置される。現在大半が4、6部屋有するものが多いが、もともとは3部屋だったものもあり、改築を経て変化していったものと考えられる。

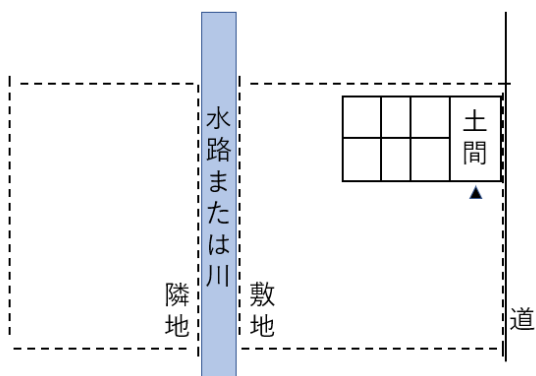


図5 宿場町の平面形式

(3) 宿場町の民家と農村部の民家の相違

敷地について、甲州街道沿いを見ると、上町東端や堰合から西側は農村部のような規模の不整形の敷地が多く見られる。しかし、主屋の配置については、建物を甲州街道に接道させる。

建物の形態に関しては、甲州街道沿いでは平面形式が農家型でも町家の立面をもつ。以上のことより、甲州街道沿いの民家は、町家の街並みの影響を強く受けていることがうかがえる。また、平面形式について、勝沼町では木造平屋建て切妻造り茅葺の民家が祖型としてみられる。そして、甲州街道沿いの農家型と農村部の間取りが類似していることから、甲州街道沿いでも職種が農家の場合は、もともと勝沼町で根付いた平面形式を引き継いだと考えられる。

8 おわりに

勝沼町の民家は、甲州街道沿いとその他農村部で街並みが異なる。農村部は、木造平屋建て、切妻造り茅葺、3間取りの形式を祖型とする。時代を経て、部屋数が4または6部屋に増える。これは山梨県の多くの民家の変遷と同じである。甲州街道沿いの民家は、木造2階建て、切妻造り桟瓦葺きで、主屋を接道させる町家の街並みをもつ。平面形式は、町家型と

農家型のものが混在しており、農家型のものは、農村部のものと類似する。

したがって勝沼町では、甲州街道の宿場町としての価値が表立っていたが、そこには中世以前の街並みの名残が混在している。

参考文献

- 1) 勝沼町役場『勝沼町誌』（昭和 37 年 5 月）
- 2) 山梨県教育委員会『山梨県の民家』（昭和 57 年 3 月）
- 3) 渡辺洋子、伊藤裕久『旧甲州街道台ヶ原宿の町並と住居形式に関する研究』（平成 13 年度）
- 4) 山梨県教育委員会「山梨県史」（平成 19 年度）